

まちの縁側 ぬくぬく亭 活動報告書

nukunuku-tei report





幸せは凡庸の中にある

豊野地区住民自治協議会会長 堀田 実

一昨年の災害からずっと「めくめく亭」の皆様にお世話になった。

“めくめく”とは誰がつけたか実にいい名前だ。

今も人気がある映画「男はつらいよ」の中に寅さんの名セリフがある。

「田んぼの中に一本の畦道があり、一軒の農家がある。庭先にはリンドウの花が咲き、あかあかと灯りがつき、父がいて母がいて子供たちがにぎやかに食事をしている。これが幸せってもんじゃないかい」というのである。

「幸せは凡庸の中にある」ということである。この生活ができなくなって“めくめく”じゃなくなった。

それを支えてくださった賛育会さんと多くのボランティアの皆様深く感謝申し上げます。

「感謝の人」の中にはあらゆる香しい要素が込められている。

謙虚さ、寛大さ、明るさ、優しさ、楽しさ、のびやかさ、だから「感謝の人」の周りにはまた人が集まる。

聖書は「受けるより与える方が幸いである」と教える。

このことをこれからは住自協が引き継いでもっと“めくめく”を深めていきたい。

本当にありがとうございました。

令和元年東日本台風災害

豊野地区被災状況【住家被害】

※り災証明書交付件数

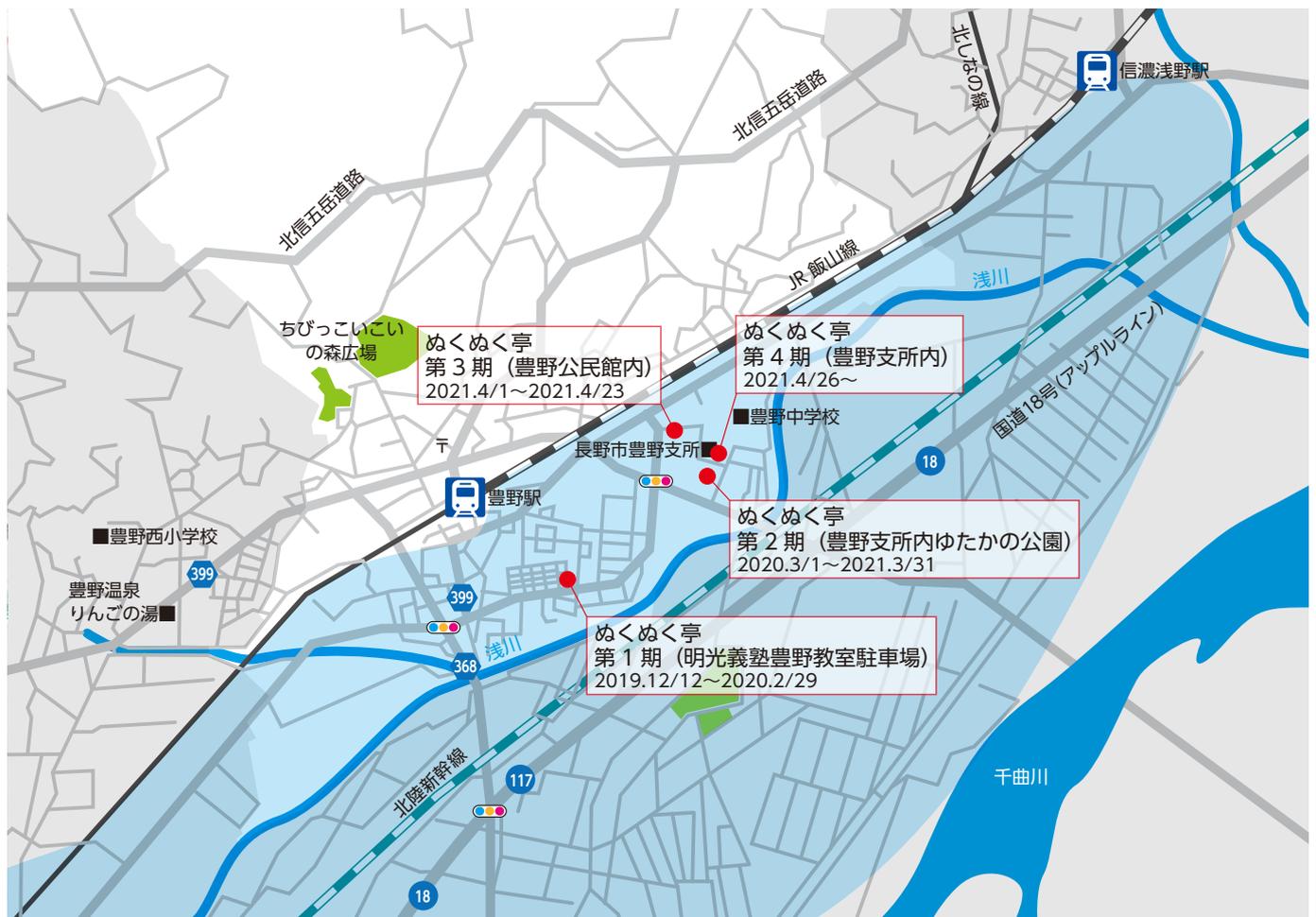
全壊	474
大規模半壊	172
半壊	133
一部損壊	138
計	917

(2021年2月29日時点)

令和元年東日本台風(台風19号)は、長野市北部の長沼、豊野、古里地区、南部の篠ノ井、松代、若穂地区を中心に、千曲川堤防の決壊や越水、その他一級河川、普通河川、排水路、用水等の内水氾濫等による浸水被害が発生するとともに、護岸の崩落や道路の損壊、立木倒木による停電、土砂崩落などが発生しました。

これにより、住民の生命及び住家をはじめ、各種都市基盤(インフラ)、商工業、農業等が甚大な被害を受けました。
(長野市災害復興計画から一部引用)

豊野地区においては、豊野駅南側を中心に、広範囲にわたり建物や農地等の浸水被害をもたらしました。



ぬくぬく亭のなりたち

日付	内容
2019年 10月13日(土)	千曲川の堤防が決壊し豊野地区は広範囲に渡って浸水。
10月23日(水)	明光義塾豊野教室駐車場にて、レスキューストックヤードによる「あったか食堂」がスタート。地元のボランティア団体や地域組織も加わり、テントによる炊き出しが行われる。
11月 2日(土)	賛育会が「あったか食堂」に加わり、訪問活動、ニーズ調査が本格化。
12月12日(木)	「あったか食堂」が発展し、明光義塾豊野教室駐車場にプレハブを設置して「まちの縁側ぬくぬく亭」がスタート。社会福祉法人賛育会の職員が常駐し、「まちの縁側機能」「アウトリーチによる訪問活動機能」等を展開。また、外部支援団体と地元協力団体を調整した炊き出しが毎週末行われる。
2020年2月	新型コロナウイルス感染症拡大につき、集合型の炊き出しを断念し訪問型の配食に切り替える。
3月 1日(日)	プレハブを豊野支所内ゆたかの公園に移設してぬくぬく亭第2期がスタート。
7月	豊野地区のボランティア団体による1日2名の常駐が始まる。
10月13日(火)	災害から1年。「10.13を伝えていく集い」開催。(実行委員会主催)
2021年 3月21日(日)	ぬくぬくフェスタ開催。これまでの「ありがとう」とこれからも「頑張ろう」をテーマに170名が参加。
4月 1日(木)	プレハブが撤去され、豊野公民館内に場所を移動してぬくぬく亭第3期がスタート。運営の中心が豊野地区住民自治協議会となり、地元主体の活動として展開。
4月26日(月)	豊野支所1階に場所を移してぬくぬく亭第4期がスタート。

ぬくぬく亭 運営協力団体

- 社会福祉法人賛育会
- 豊野地区住民自治協議会
- 豊野区
- とよの被災者支援チーム集楽元快
- 豊野専修高等学校
- 長野市災害ボランティア委員会
- 長野市社会福祉協議会
- 長野県社会福祉協議会
- YMCA 長野ワズメンズクラブ
- 長野県災害対策本部ボランティア班・NPO 支援チーム
- 認定NPO法人レスキューストックヤード
- 災害 NGO 結

ぬくぬく亭利用人数(延べ)

2019.12 ~ 2021.3

区分	人数
豊野地区	4009
地区外	790
ボランティア	1141
その他	1331
合計	7832

(2021年3月28日時点)

ぬくぬく亭活動実績

	2019		2020										2021			合計	
	12月	1月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月		2月
作業件数	2	2	15	26	42	27	28	16	19	18	23	21	16	13	12	2	282
訪問件数	106	93	82	74	68	61	55	52	39	22	18	15	11	7	8	4	715

まちの縁側「ぬくぬく亭」の始まり

社会福祉法人 賛育会 松村隆

10月13日の台風19号による氾濫で長野市豊野地区も大きな被害を受け、多くの高齢者や障がい者世帯も被災しました。10月末からレスキューストックヤードが「あったか食堂」の名前による炊き出しを始め、他の団体も協力して豊野地区の約260世帯の情報を調査しました。世帯状況、被害や避難状況、今後の住まいのあり方、困りごとなど聞き取りました。そして多くの世帯に要援護者が要見守り対象者がいること、また買い物や通院などにも支援が必要とされていることが分かりました。

その後も状況は刻々と変化しており、継続的な訪問と聞き取ったニーズに応じた対応が求められていました。多くの団体と個人の参加を得ること、情報をまとめることが大切であると感じ、2020年5月ごろまでを目途に、定期的に様々な知見や経験をもつ方々でチームを作り、聞き取り訪問、ニーズに応じた具体的対応策を考え、それを実行するチームを作るという取組が必要という協議が関係団体で行われました。さらに必要経費は赤い羽根共同募金等で確保しました。

12月12日に豊野地区に「ぬくぬく亭」を開設し、人々が集まりやすくするための様々な行事やこれまでの調査結果に基づいて、避難所閉鎖後の状況確認のために再度訪問によるニーズ調査をして、対応活動を組織的に多くの関係団体と共に作り上げてきました。

毎回打合せを重ねて、多くの皆さんが参加でき利用できる「まちの縁側」となっていることに感謝しており、4月から形を変えてこの働きが継続していくことを願っています。

ぬくぬく亭の4つの機能



まちの縁側
機能

訪問
による
アウトリーチ
機能



まちの縁側
ぬくぬく亭

地域支援
活動機能



広報・
イベント
機能



ぬくぬく亭の役割 活動と成果

まちの縁側ぬくぬく亭 運営リーダー 春原圭太 (社会福祉法人 賛育会)

いつでも行ける、 いつでも話せるまちの縁側機能

ぬくぬく亭はレスキューストックヤードによるあったか食堂の炊き出し支援から始まりました。豊野地区は被災後、被災者同士が集まり交流するスペースが無く、気軽に寄れる縁側として2019年12月12日に旧明光義塾の駐車場にて開設されました。13団体が協力し運営をスタートさせ賛育会職員が常駐を始めました。ぬくぬく亭は10時から17時まで開館し、誰でも来ていただけるような仕組みを作ってきました。土日も閉めることなく必ずスタッフが常駐し被災者とのコミュニケーションや会話などから様々な相談を受けてきました。

スタッフが常駐することにより「ぬくぬく亭に行けば必ず誰かに会える、必ず誰かがいる」という寄り添いの機能を活かしながら被災者の気持ちを焦らせないよう素直な思いを尊重し、まちの縁側機能の維持継続をしてきました。

ぬくぬく亭を通じて被災後数か月ぶりに住民同士が再会し、涙を流してお話をされている光景や、住民同士がお話をしていると悲しいお話から段々と前向きな会話になっていくところを目の当たりにして、ぬくぬく亭の存在の大きさを日々実感するようになりました。開設当初は住民の方から絶望感や悲しみなどのマイナスな部分のお話が多く、スタッフもどのように声をかけていいのか分からず戸惑い、多くの苦勞をしました。ですが毎日のようにお話をすることで住民がスタッフに心を開いてくださることが段々と増え、不安、恐怖、今後の再建について心の中の想いをお話して下さることが増えたことが、今の住民とのつながりになっており、常駐することの意味の大きさを改めて実感しました。

発災から1年5か月が過ぎ、今のぬくぬく亭には住民の皆さんの笑い声や楽しい会話が弾んでいます。毎日のように来られる方や「近くに来たからお茶を飲んでいこうかしら」とおっしゃる方、お昼を持ってきて食

べて帰られる方もおり、住民それぞれがぬくぬく亭を自分なりの憩いの場として活用して下さっていることが非常に嬉しいです。

地域支援活動

発災後、豊野地区ではかがやき広場の駐車場を使用し、10月18日から12月15日まで長野市災害ボランティアセンターの豊野サテライトが開設されました。作業ニーズ件数は延べ1200件、ボランティア受け入れ人数は延べ6000人にのびりました。豊野サテライトが閉じた後は作業ニーズがないか豊野地区をスタッフが個別訪問をしてニーズを把握していくと、作業ニーズが想像以上に多く寄せられたため、ぬくぬく亭が窓口となりサテライト機能を活かした地域支援活動を始めました。

ぬくぬく亭開設当初は賛育会から常駐スタッフが16名いたため、何班かに分かれながら作業をしました。12月の段階では

ぬくぬく亭の役割

活動と成果



まだまだ泥出し、泥にまみれた家財の運び出しのニーズが多く、毎日泥だらけになりながら作業を行っていました。ときには床下に潜り水分を含んだ泥を取ったり、豊野区の側溝の泥出しも行ってきました。また、作業数も多い時は1日6件ほどあり、時間の調節、活動日の調整などを行いながらニーズ対応のマネジメントをしてきました。

ぬくぬく亭の地域支援活動は、現地にスタッフがいたためニーズの依頼に対して迅速に対応出来るところが強みでした。また、賛育会のスタッフは緑色のビブスを着て作業をしていたため、段々住民に周知され現場で作業をしていると「うちもお願い」と声をかけていただく事も多くなり、住民との信頼関係、地域との絆も同時に得ることが出来ました。

一方、段々と賛育会常駐スタッフが減ってくるにつれ大がかりなニーズに対応することが難しくなってきました。しかし地元ボランティア団体や住民の方がぬくぬく亭の活動に協力して下さるようになり、活動

を継続することが出来ました。ぬくぬく亭が開設されてから現在まで280件のニーズに対応してきました。ニーズは時期によって変化をし、開設当初は泥出し、泥が付いた家財の搬出がメインでしたが、その後、リフォームされるお宅に関しては廃材の破棄、床や壁剥がし、木材のブラッシング、消毒、リフォーム後の引越し作業がメインになりました。また、公費解体されるお宅に関しては家屋内の家財破棄、お庭の樹木の伐採を行うなど時期によって作業内容も変化してきました。そして、作業をする際には住民との会話も大切にしながら関わることが出来ました。

アウトリーチをしながらの訪問活動

発災直後の豊野地区は、2階に住んでいる被災者もいたため、そういった世帯の把握や健康状況、家屋等の被災状況を確認する訪問活動が必要になり、900軒以

上にのぼる被災家屋を1軒ずつ回りました。訪問の内容も時期によって変えていきながら雨の日も雪の日も訪問を続けました。発災直後から2020年2月までは被災状況の確認、2階に住んでいる被災者宅が何軒あるのかをアセスメントシートを活用しながら記録に残していき、地図に色付けをしながらぬくぬく亭独自の訪問マップを作り活用してきました。作業と訪問を同時進行しながら、軒数を多く回ることを意識するのではなく1軒1軒の住民の様子、ニーズを聞きながら住民の気持ちに寄り添えるように取り組みました。

3月から7月にかけては公費解体を行い、転居するかまた同じ場所に立て直すのか、リフォームを行うのかの聞き取りを訪問しながら行い、住民の動向を確認して訪問マップを更新していきました。この時に訪問をしていて気付いたことは、迷っている方が想像よりはるかに多かったことです。家族内での意見がなかなか合わないことや、リフォームをしてまた水がきたらどう



しようかという点が住民を不安にさせるポイントになっていました。

7月からは出水期に入り、河川に近い住宅、1人暮らしのお宅、高齢者夫婦のお宅を訪問し、緊急時の連絡先の確認、1階にある家財や大切なものを2階へ避難させながら定期的に訪問をしました。7月8日には浅川の水位が上昇し氾濫の恐れがありました。その時もスタッフが通常より行動を早めに開始し、支所と連携しながら情報を共有して1人暮らしのお宅と高齢者宅を1軒ずつ訪問し安全確認をしました。動悸を起こしたり恐怖を感じている方も多く、出水期は特に気を使いながら訪問をしました。

8月からは公費解体の状況、リフォームの状況を確認しつつ、作業ニーズが残っているか確認しながら訪問を進めました。独自の訪問マップも時期に合わせて3回のアップデートを重ねデータを更新し、また、訪問時は個別のケースをスタッフ間で情報共有できるように記録しながら日々の変化に対応しました。訪問件数は延べ700件に

のぼりました。

広報活動

ぬくぬく亭開設時はなかなか周知、広報が難しかったため、少しでも情報が行き渡ればと思い、すぐにFacebookを始めました。一方、SNSで情報を収集できる住民もいれば情報収集が難しい高齢世帯の方もいます。高齢世帯には訪問をしながらぬくぬく亭のチラシを配って情報を出しながらぬくぬく亭の存在を知っていただくところから始めました。開設当初は住民が来るのが少なかったですが、訪問をしながら広報をしていくうちに段々と住民が集まるようになってきました。来所された方が友達を連れ、その友達がまた友達を連れて来るというサイクルがいつの間にかできていたように感じます。

ぬくぬく亭の活動が段々知られて来るにつれメディアからの取材を受けることも増え

てきました。1人でも多くの方にぬくぬく亭を知っていただきたい、どんな活動をしているのか知っていただきたいという思いでお話をさせていただきました。復旧のスピードに合わせ取材内容も変わり豊野地区の復興状況、被災者の様子など環境の変化に合わせ随時伝えてきました。

2020年の3月に入ると新型コロナウイルスの報道が多くなり、復興のニュースは段々と影を潜め情報が風化しつつありました。しかし、当時の豊野地区は公費解体やリフォーム真っ最中。そしてまだ解体かリフォームかで迷っている方も非常に多い状況でした。そこで、復興はまだまだという思いを一心にして、ラジオ、新聞、広報誌など数多くのもので発信を続けました。被災地の現状を伝えられることもぬくぬく亭にできることの一つです。復興状況、心機など自分たちが感じてきたことをお話しすることにより、多くの方の記憶、記録として残すことを目指してきました。

ぬくぬく亭の役割

活動と成果



ぬくぬく亭の運営

開設時の豊野地区は住民の皆さんが住宅の泥出し、家財運び出しなどの作業に追われており、楽しみであったり栄養のあるあつたかい食事を摂ることが難しい環境にありました。また、住民の中には平日仕事に行き土日は復旧作業という方も多く、レンジ等がないため温かいものを食べることが出来ない世帯も少なくありませんでした。そこで、少しでも疲れの癒しになっていただければとの思いで毎週日曜日は炊き出しの日にして協賛団体で検討し県内外のチームによる炊き出しを行いました。多い時は200食にのぼる食事が提供されました。

しかし、3月になると新型コロナウイルス感染症に伴い、集合型の炊き出しから形を変えて配食に切り替え、地元の団体の集楽元快やスーパーなどの力を借りて4月末までスタッフの訪問による配食を行いました。お弁当には数の限界もあり高齢者、一人暮らしのお年寄り世帯をピックアップし、

30食程まで食数を減らさざるを得なかったですが、1軒ずつ訪問をし顔色や体調面など確認しながら配りました。

ぬくぬく亭には当初賛育会職員が16名常駐していました。職員数が多かったため訪問活動、地域支援活動を並行しながら行えていましたが、賛育会豊野事業所の復旧が徐々に進むにつれ常駐職員も事業所に戻るようになりました。2021年3月には2名まで減り、活動も出来る範囲で行って来ました。2020年7月からは地元のボランティア団体が土日も含めて毎日シフトを組み、1日2名ずつ運営に携わっていただき、10時から15時まで職員と共に常駐をしてくださるようになりました。また、地域支援活動も軽トラを持っている地元の住民が協力してくださるようになり、一緒に家財の運搬を行ったり段々地元の住民の皆さんを交えながらの活動に移行して来ました。ボランティアの中には被災をされている方もいます。被災はされてもボランティアとして支援に携わりコミュニティの再生

に力を注ぐ姿が本当に力強く、ぬくぬく亭を通して実践できています。活動も運営も段々と住民が主体となり、「自分たちの町は自分たちで守る」の仕組みが形となって出来てきました。



めぐめぐ亭運営会議

めぐめぐ亭開設後、毎月1回協力団体が集まり、めぐめぐ亭の運営状況の確認や、各団体の取組、イベントの開催状況などの情報共有を目的として、運営会議を継続的に開催してきました。

協力団体には支援団体だけでなく、豊野区や住民自治協議会をはじめとした地元の住民や組織も加わり、被災者や被災地区が抱える実際の課題を支援団体と検討する場となりました。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、従来、地域で開催さ

れていた人が集まる活動の中止が相次ぎ、また、外部団体の支援も制限せざるを得ない状況となりました。そこで、運営会議では、被災者にとって、今、必要な支援を、感染症対策を講じながら継続していくことを模索し続けてきました。

そして、協力団体がそれぞれのネットワークを活かして、住民や地域と連携して取り組んでいったことが、めぐめぐ亭の強みとなりました。



要支援者情報共有会議

めぐめぐ亭では、被災した住宅の2階等で生活されているお宅や、日中、片付けのため避難先から戻っておられるご自宅を毎日訪問しました。被災者の健康状態や家屋の状況を確認しながら、不安や心配ごとなどの様々な課題を把握し、支援を必要とする被災者を地域や支援機関と一緒に支えていくために、毎月定例で「要支援者情報共有会議」を開催してきました。

共有会議では、把握した「気になる」世帯に関して行政、地域

包括支援センター、保健センター、ささえあいセンター、支援団体等が情報を共有し、連携して必要な支援につなげ、経過を見守ってきました。

復興が進みつつある今、被災をきっかけにつながった人、機関、制度、施設等との様々な関係を活かし、めぐめぐ亭は今後も被災者を支える支援ネットワークの一つとして地域にあり続けたいと願っています。



協力団体からのメッセージ



豊野の「地域力」から学ぶこと

認定 NPO 法人レスキューストックヤード (RSY)

常務理事 浦野 愛

『まちの縁側ぬくぬく亭』の前身となった、『およりなして・あったか食堂』は、善財区長の「家の2階で生活している方々がとても心配」という言葉から始まりました。地域を歩くと、「食事が一番大変」という声が多数聞こえてきました。そこで、全国の仲間を呼びかけ、明光義塾豊野教室駐車場をお借りし、10月23日～11月27日まで、『およりなしてあったか食堂』を開催。運営は、長野市災害ボランティア委員会、賛育会、豊野高等専修学校の皆さんと協働で行い、約5,000食を提供することができました。その後、この活動が地元の皆さんの手によって、『まちの縁側ぬくぬく亭』に発展し、今や、地域に無くてはならない場所として機能しています。この活動を支えてきたのは、まさしく豊野の「地域力」。私たちは皆さんと活動を共にする中で、福祉のまちとして長年培われてきた地域愛と、困った人がいれば自然と手を差し伸べる、そんな素晴らしい住民の方々の存在が、「地域力」の源になっていることを学ばせていただきました。皆さんとの出会いは宝物です。次の被災地へ受け継ぐべき、貴重な経験として、多くの方々に伝えたいと思います。

ぬくぬく亭に関わって

災害 NGO 結

代表 前原 土武

災害 NGO 結は、時々顔を出してお手伝いするという形で関わらせていただいています。そんな我々から見て、ぬくぬく亭はこの先の被災地が参考にする事例の一つになるのではと思っています。

新興住宅街豊野町の被災は、仮設・みなし・在宅とさまざまな避難形態が混在し、誰がどこにいるのか、一人ひとりの生活実態が見えにくいことが課題でした。だから、ぬくぬく亭という場所を構えるだけでなく、こまめに地域を歩いて積極的に地域に関わる姿勢が素晴らしいと感じていました。

こうしたアウトリーチを続け、新型コロナウイルスという災いの中でも、完全閉鎖することなく地域に居続けました。ただずっとそこにあるということは、簡単なことではなかったはずです。

災害発生当初から豊野住自協や賛育会といった地元の関わりがあり、それを社会福祉協議会などさまざまな機関が支えたからこそ、今日まで続いているのではないのでしょうか。

これからも復旧の歩みは進み、それに合わせてニーズも変化していきます。移ろいゆく地域の課題を受け止め、解決につなげるぬくぬく亭が、これからも地域に根付いた活動を続けられますようにと願います。

結として遠くからでも、それを支えることができれば嬉しいです。



災害支援と地域福祉の融合

長野市災害ボランティア委員会

阿部 今日子

私たちがまちの縁側ぬくぬく亭の立ち上げに関わることになったきっかけは「あったか食堂」です。避難所への炊き出しなどのマッチング事業が始まった頃、地域の情報共有会議に出たメンバーが「豊野で在宅避難者向けの炊き出しが始まる。手伝ってくれる人が必要」と声をかけました。それを聞いて数人が現場へ。「被災宅へ配達しながらニーズ調査をした」「ご飯ものの炊き出しが必要」と報告があり、それならと手中の情報にあった「中華丼炊き出し」をつなぎ、メンバーと手伝いに行きました。

被災の傷跡生々しい明光義塾前駐車場。小さな子どもを連れてくる人、片づけの合間に来る人などが列を作ります。レスキューストックヤードの浦野さんたちは地図上に来た方のお家をマーキングし、心配な方を訪問していました。これぞ災害支援と地域福祉の融合！協力したい！と思いました。おやき、カレー、讃岐うどん、豚汁、漬物…いろいろあったなあ。語り尽くせない思い出。そして冬。忘れもしないカビ臭く寒い明光義塾の中での会議、「まちの縁側ぬくぬく亭」誕生の瞬間です。

混乱する中迷いながら活動していた私たちにとってもぬくぬく亭は大切な場所。これからもぬくとまる場所でありますように。

「ぬくぬく亭」開設に至るまでの経過と思い

社会福祉法人長野市社会福祉協議会

地域福祉課 野口 一輝

長野市災害ボランティアセンター豊野サテライト開設から3週間程経過した11月初旬、豊野区の自主避難所での運営支援等を行っていた認定NPO法人レスキューストックヤードの浦野愛氏より「被災された方々が気軽に集える交流の場」の開設について提案があり、この構想に携わらせていただくことになりました。まず、浦野氏と一緒に動いたのが、運営者、財源及び拠点の確保でした。運営者の確保については、住民自治協議会や地元住民有志で活動していた「集落元快」、社会福祉法人賛育会といった豊野地域を活動主体とした方々への声掛けを私が担い、これらの方々の運営の下支えをするNPO等への声掛けは浦野氏が担うという役割分担を行いました。財源確保については長野県社会福祉協議会に相談し、長野県共同募金会の支援を得ることが叶い、拠点の確保については難航したものの地主さんの理解もあり確保できました。「他所の人が来て知らない間に運営する場ではなく、豊野の住民の皆さんが豊野らしさを活かした居場所をつくる」ことを掲げ立ち上げた「ぬくぬく亭」開設から1年余りが経過する中、新たな活動の段階に進むとの知らせを聞き、非常に感慨深く、楽しみでもあります。末筆になりますが、関係者の皆様のご健康とご活躍をお祈りしています。



地域を育む拠点

とよの被災者支援チーム集楽元快

代表 清水 厚子

自宅は床下浸水、次男宅は186cmの床上浸水でした。在宅避難者への支援は薄く、食事すらない日々が続きました。そこで、誰もが困難な状況の中でできることは何か考え、駐車場にテントを張り自宅から炊き出しをしてみました。通りすがりの方や他の家のボランティアにも声をかけ、誰もが困っていた中で限界集落化を防ぎ、福祉のまちを取り戻したい思いが湧いてきました。住民自治協議会に相談し「とよの被災者支援チーム集楽元快」を立ち上げ支援物資提供や炊き出しを行いました。被災すると生命を守る→生活を立て直す→心の健康を守る等、場面に応じた支援が求められます。高齢被災者など情報が届かず、サービスを選べない人がおられることも知りました。被災者支援拠点が欲しいと思い被災直後から炊き出しをしてくださっていた「あったか食堂」に因み「ぬくぬく亭」と名付けた「まちの縁側」を仲間と共に開きました。炊き出しや支援物資と共に愚痴やおしゃべりで元気を回復する場になってきて、人の中で傷ついた人が、人の中で回復する姿も見えてきました。

いつの間にかぬくぬく亭は被災者支援を越えて地域を育む拠点の一つになってきました。まさにまちの縁側そのものであり、復興への原点として更に地域に根付いてほしいと願っています。

自分たちができること

豊野専修高等学校

高橋 桂子

台風19号災害で、浸水する家と地域と施設を目にした豊野高等専修学校は、災害に遭って3日後から学校に集まれる職員と生徒で、豊野中学校・賛育会・豊野支所・個人宅と災害の片付けのボランティア活動に参加しました。

その活動後、生徒たちが自ら集まり、自分たちにできることは何かと意見を出し合いました。そして、避難所にも訪問し、そこで子どもたちが遊べていない環境にも気づきました。それにより、小学校との交流も始まりました。炊き出しのボランティアにも生徒と一緒に参加し、そこでは、生徒が個人宅に支援物資を一緒に届けました。また、ぬくぬく亭で賛育会職員の方とボランティア活動もしました。

これらの経験は、生徒1人1人の心にいろんな感情を生みました。生徒から「自分たちにできることを長く続けること」、そして、「笑顔を作れるような関わりをしたい」といった言葉が印象的でした。これからも地域にある学校として、自分たちが出来ることを一緒に活動していきたいと思います。



ヒト、コト、モノ、情報が集まる縁側

長野市社会福祉協議会

生活支援・地域ささえあいセンター 小野 貴規

長野市社会福祉協議会では災害ボランティアセンター豊野サテライトを令和2年10月18日から12月15日まで開設・運営、12月19日から生活支援・地域ささえあいセンターを開設し、被災により自宅に住めず仮設住宅での生活を余儀なくされている方や、被災した自宅2階などで不自由な生活を送る方を訪問し、見守り活動や様々なご相談をお受けしています。

本会もめぐめぐ亭の立ち上げに参画し、その後も様々な形で関わっています。めぐめぐ亭の大きな特徴であり強みは、なんといっても地域住民や地域団体、法人等が、自ら被災しながらもその中心となってコミュニティの支援を実践しているところです。特に社会福祉法人賛育会のメンバーを中心に毎日隈なく地域を回り、徹底的に住民に寄り添い、受け止め、集め、支援につなげたニーズは多様で深いものでした。私たちささえあいセンターでもめぐめぐ亭と情報を共有することで、暮らしの様子、つながり、地域への思いなど、その方を知ることで、より良い支援につなげています。誰も排除しないめぐめぐ亭という「縁側」に、これからも多様なヒト、コト、モノ、情報が集まり、福祉のまち豊野の地域力はさらに進化、深化することでしょう。



“ごった煮”の“雑談力”で育った“めぐめぐ精神”

社会福祉法人長野県社会福祉協議会

山崎 博之

災害直後に外から駆け付けたNPOにより始まった炊き出し活動。徐々に地元の住民や地域のボランティアが加わり、さらには、事業所が被災した社会福祉法人賛育会も加わり「あったか食堂」として展開。そして、その活動の地に被災から2か月後にプレハブが設置され「まちの縁側めぐめぐ亭」の誕生となりました。

めぐめぐ亭は、「地域の復興なくして、事業所の復興なし」と賛育会が常時職員を配置したことで、常設型の居場所として住民やボランティアが集う場所になっていきました。さらに、地元のボランティア団体による常駐が始まると、地域の温かい雰囲気があるまちの縁側へと成長していきました。定期的に通う被災した住民、フラッと立ち寄る地域の方など様々な人たちが集まり、自分のペースでいられる空間。集落元快の清水さんは「ごった煮で人が集まり、雑談が繰り返されることで本物のつながりが生まれる」と話します。

災害時のボランティア・NPO がきっかけで始まった活動を、地元の社会福祉法人がけん引し、地域のボランティアが支えながら地域に着地をしていきます。これからも末永く、地域の大切な居場所として、活動として、「めぐめぐ精神」が脈々と続いていくことを願っています。



ぬくぬく亭報告書の挨拶

社会福祉法人賛育会 森 佐知子 堀家 世司

2019年10月の台風19号による千曲川の決壊は甚大な被害となり、長野市北部地域を中心とした流域を襲いました。賛育会も床上2.4mまで浸水し1階の機能は全て停止し、利用者276名全員を避難・搬送しました。建物の復旧工事を急ぎ行い、2021年1月末、計画したすべての事業を再開することが出来ました。この間、地域の方々、関係各所の多くのみなさまからのご支援をいただき感謝を申し上げます。

賛育会は今から103年前の1918年にキリスト教の隣人愛の精神を理念として東京で活動を始めた法人です。活動が繰り広げられる中、関東大震災や東京大空襲で、全ての活動拠点が焼失し、1945年の東京

大空襲後に長野県へ疎開しました。

翌年、賛育会は豊野町の伊豆毛神社で仮診療所を開設しました。現在の地での開設は当時の豊野町の方々の全面的な協力があったからこそです。この豊野町で75年余もの活動が行えることができるのも、これまでの皆様からのお支えや、施設に訪れる豊野町の方々による多くのボランティア活動があったからです。

今回の被災で、賛育会は“地域の復興なくして事業所の復興なし”を合言葉に、ぬくぬく亭を含めた地域活動に延3,600名の職員で行って来ました。私たち職員も事業の継続や、普段と異なる環境の中、新型コロナウイルスも重なり、様々な活

動が制限され、先が見えない不安の中の活動でした。その中で、支えになったのは前向きに復興に取り組む地域の方々の方々に励まされ、多くを学ぶ機会も同時に得ることができました。

年度の節目に、これまでの活動の形は一旦終了となりますが、賛育会の理念である“相手を思い、寄り添う”という先人の思いと、地域の皆様への感謝を忘れず、今後も一緒に歩んでいきたいと思えます。

ぬくぬく亭は地域のみなさまが気軽に立ち寄れてホッとする場所です。困ったときはお互いに助け合う“ぬくもりの心”が通いあう場所、そんな居所にしていましましょう！

今後のぬくぬく亭の機能

豊野地区住民自治協議会

発災から今日まで賛育会職員が常駐し、土日も休むことなく住民を受け入れてきたぬくぬく亭ですが、4月からは地域住民や豊野地区住民自治協議会が主体となり運営していくことになりました。

発災当初は炊き出しやイベントが中心でしたが、日が経つにつれ、ぬくぬく亭に行けば必ず誰かに会える、懐かしい人に会える、やっぱり豊野に帰ってくればホッとすると、そんな役割を果たしてきました。

こうした住民の声に応えたく、豊野地区ボランティア連絡協議会協力のもと住民がボランティアで当番を組み、職員と

ともにぬくぬく亭を開けてきました。

ぬくぬく亭に来館された人の中に、「災害直後多くの方の支援を受けてとても助かったから今度は私もボランティアをしたいのだけど、お役にたてるかしら？」という方がいらっしゃいました。ぜひ、ぬくぬく亭の当番のお手伝いをして下さいとお誘いをしたところ、どんどん表情が明るくなるのが分かりました。「日々ボランティアをすることで自分も人の役に立っている。自分の居場所ができた。誘ってくれてありがとう」とおっしゃっていただきました。

ぬくぬく亭には「ひとりでお昼ご飯を

食べるのが寂しいから寄らせて」という方や、「友達と編み物をしたいから寄らせて」という方がいらしたり、毎日お茶を飲みに来る方がいます。

被災者の交流拠点として開設されたぬくぬく亭が、今では地域住民が「誰でも気軽に寄れて交流できる場」になりました。

まさに、“福祉のまちとよの”に必要な、みんなが集って助け合える場所に大きく育ててくれた各団体の皆さまに感謝しながら、これからも「まちの縁側ぬくぬく亭」をもっともっと地域に根差し、お互いさまの精神で発展していけるよう住民同士協力し、守っていきたくと思えます。



今後関わっていく住民代表からの言葉 まちの縁側ぬくぬく亭再出発の想い

地元ボランティア代表 山岸 幸子

まちの縁側ぬくぬく亭が明光義塾の駐車場で被災住民のための交流サロンとして開設されました。生活支援の情報、支援物資の提供、炊き出しなど被災者のニーズに応じた手厚い支援が行われてきましたが、心に傷を持つ被災者の痛みを癒してくれるのは、公助はもちろんですが一番大切なのは共助だと気づきました。ぬくぬく亭に必要な不可欠な人、それはボランティアの皆さんでした。災害で壊滅したわが家の状態と明日への生活の不安・・・心の痛みを話せる人、共感できる仲間がほしいのです。

地元のボランティアの皆さんが当番を組んで待っていてくれるので入りやすく、「元気だった？今どこにいるの？」と一気に話は弾みます。何年振りかで再開もでき、涙ながらに笑顔になれる。ぬくぬく亭はそんな場所です。

解体した人、リフォームした人、新築した人。

それぞれ家庭の事情は違っていても皆の想いは一つです。災害前のまちに戻ることは無理でも、復興がいつになるのか未定でも、人と人との絆、心の深い痛みにも寄り添える人生でありたいと思っています。

これからもこのぬくぬく亭が「福祉のまちとよの」のシンボルとなるよう知恵と力を出し合って皆で頑張っていくつもりです。



復興の灯りを目指して

まちの縁側ぬくぬく亭 運営リーダー 春原 圭太

まさか私の勤務先が被災するとは想像もしていませんでした。しかし「地域の復興なくして事業所の復興はない」を、職員が大きなテーマとし地域支援を継続して行ってきました。地域に出て多くの住民さんと出会いつながり豊野の復興に共に携われたことがとても嬉しく思います。

ぬくぬく亭を開設し1年が過ぎました。協力団体の皆さんと共にぬくぬく亭もそして自分自身も

大きく成長させて頂き感謝申し上げます。4月からはぬくぬく亭は場所を変え豊野支所内に移動します。地域の皆様、今まで支援して頂きました皆様と共に今後も福祉のまち豊野となるよう引き続き携わっていきたくと思っています。

最後になりますが、協力して頂きました関係各位に厚く感謝申し上げますと共に、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。



まちの縁側 ぬくぬく亭 活動報告書

nukunuku-tei report
2021.3

まちの縁側 ぬくぬく亭は
赤い羽根共同募金を活用して
設置・運営しました

発行元

まちの縁側 **ぬくぬく亭**

Facebook
日々の活動を
発信中



Youtube
令和元年
東日本台風災害
支援の取組を
発信中



お問合せ

社会福祉法人 **長野県社会福祉協議会** (運営協力団体)
〒380-0936 長野市中御所岡田 98-1
TEL.026-228-4244 FAX.026-228-0130
[URL] <http://www.nsyakyo.or.jp/>